契　約

水乃ヘルギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
契　約

【Ｎコード】
Ｎ０３１５Ａ

【作者名】
水乃ヘルギ

【あらすじ】
悪魔と契約！これは、やっちゃった（危険な）人の物語！？

契約とは何か

契約、それはある事柄に対しての誓いである。
中世の錬金術師や悪魔召喚者が使ったとされる、秘術であった。

しかし悪魔は恐ろしい存在ではない。
下手をすると命をとられるというが、ソロモン王のダビデマークを身につけたらよかろう。
魔法円、魔法陣と呼ばれるものや、ペンタグラムの多くは、ソロモン王が編み出したので彼の技術に基づいている。
千一夜物語においての呪術もソロモン王にちなんだ話が多かった。

現代における契約というものは、ほとんどが法律社会だ。
なんでもかんでも『訴えてやる』ためのものでしかなく、それは利害関係で成り立つことでしか、効果を表さないが、悪魔との交渉は違う。
見えない力で相手をのろえ、そして術者の欲望を満たしてくれる。これは魅力だろう。
しかし、ブームだから、といって手を出すのはやめたほうが無難だ。
なぜなら、悪魔の目的は、召喚者の肉体をいただこうとし、自分が術者に成りすますつもりでいるのだから。
そして立場が変わると、召喚したものが悪魔に使役されるのだ！
・・・・・・というのが一般論で、おそらくそう唱えたのはナポリの修道士、トマス・アクィナスであろう。
アクイナスは師匠のアルベルトゥス・マグヌスを批判し、悪魔大全などを手がけた。
しかし先ほども言ったが、悪魔は怖くなどない。
なぜなら・・・・・・過去に失われた栄光を持つ、古代の神々が

「悪魔」なのだから。

悪魔の書と対照的に、天使の書、エノク書があるが、これもなれないものが使うと危険なことに代わりはない。

アポクリファ（異端書）を読むのともわけが違うので、ソロモン王の術を実践する人は、気をつけねば・・・・・・。

※アルベルトゥス・マグヌスには逸話が多く、彼はホムンクルスを発明した第一人者として描かれることが多い。しかし弟子の修道士に非難されるとはどういう気分なんですかねぇ。

契約とは何か（後書き）

けいやくぅ、それはぁ、・・・・・・愛・・・・・・・・・！？

そらま、たしかに愛がなきゃ呼べませんが。

あたしはリリス

一口に契約、といっても・・・・・・。

ヘルマンの場合、まったく予想していなかった。

まさか悪魔が、美女だったなんて！

「何見てるの。早くお風呂入れてよ。もう、汗かいてべたべたするんだからぁ」

ヘルマンは、すべすべした彼女の太ももを見ないフリしつつ、それでもついつい・・・・・・を繰り返していた。

「あっはん。そう、そんな気になる？　かわいがってあげようか、ぼーや」

ヘルマンは興奮して叫びそうになる、やった！　これこそわが夢、わが青春！　俺の人生、こうでなくちゃあ！

「そんな。お、俺はただ」

「いいのよぉ、照れないで。ヘルマンさま、かわいいから特別に、見せちゃおうかなー、ふ・と・も・も」

彼女はスカートをまくって見せる。

だがすぐ元に戻す。

悪魔ちゃん、リリスは見抜いていた。

ヘルマンは否定したが、おさえ切れない欲情が体内で煮えたぎっていることを。

「ひい～、蛇の生殺しって、きっとこういうことを言うんだろうなあ・・・・・・」

ヘルマンは立っているのがつらくなってしまい、その場にうずくまってしまった。

「なに落ち込んでるの。さっさとお風呂沸かしてよ」

・・・・・・どっちが主人か、わかりゃしなかった。

ヘルマンは騎兵隊長の子供で、隊長のひとり息子であった。
しかし隊長は何を思ったのか、ヘルマンをひとり引き離すと、ケルンの大学へ押しやり、自分はハプスブルクの神聖ローマに仕えてしまったのだった。
そのとき、ケルン大学でヘルマンが学んだことといえば、レメゲトンだの、ゲーティアだのといった古文書で、ほとんどがヘブライ語かラテン語で書かれたものだった。
しかし生真面目な傍らで、ヘルマンはどこかが抜けていたため、いつも賭けに負けて痛い目にあってしまっていた。
「どうした。賢者の石でも創ってみろ、ぐずでのろまな、ヘルマンくん」
父親が騎兵隊長であることは、かえってヘルマンの重荷でもあった。
だから連日のようにいじめられ、
「お前の親父は立派なのに」
と捨て台詞される。
この時代、学ぶのは男ばかりで、しかも貴族や富豪の商人の子が多く、彼らはここで何を学ぶかといえば、金を稼ぐすべ、生活をするすべ、貴族に媚を売るすべなどを学び、出世するための知恵を得た。
ヘルマンは数年したら、ラファエロ・サンツィオのような大画家のパトロンとなり、同級生に泡を吹かせることになるのだが、それはまた次に。

「そういえばボローニャ大学では、生徒がボイコットしたらしいよ」
そこまで大学生活は荒れていた。
しかし教師たちは生徒を失えば生活ができないため、あわてて呼び戻した。
こうしてますます、乱れていく学業世界。
ケルンも似たようなものだったが、ヘルマンには差障りなどなか

った。
たったひとりになってもヘルマンには、大学を卒業する自信があったからだ。
いや、かえってひとりになるほうが助かる、とさえ思う。
ヘルマンはふさぎこんでばかりの青年だったから、友達はいなかった。
彼はとりわけ、クセノフォンを愛し、騎兵隊長の話を何度も読んで、遠い父を思うのであった。

「俺にはクセノフォンがあるからね。べつに寂しくなんてない」
というヘルマンに、あるとき、やってきてしまったのだ、そのときが！
悪魔召喚術！
ヘルマンは知識を蓄え、興味を持ち、実践がしたくて、うずうずしてしまった。
「召喚か。おもしろいね。ぜひ俺にやらせてくれよ」
クセノフォンが一番だったヘルマンは、ついに第一がゲーティアになってしまった日であった。

あらわれたのは、妖艶な美人。
「うおー、すげえ！　神様、ありがとう」
ヘルマンは彼女に対して第一印象から好意を抱き、胸をばくばくさせながら、名前は？　住所は？　電話番号は？（ぉぃ）とひっきりなしで尋ねた。
「あたし、リリスって言うの」
といって、ヘルマンにウインクする。
「リリスって、たしか、アダムの最初の妻だよね。エヴァ以前の」
「あら、よくできましたぁ。そうよそうよ。そのリリス。ヨロチク

ね、坊や」
「坊や！？　馬鹿にするなぁ！　俺は坊やって歳じゃないぞ！　それに名前があるんだから、ヘルマンって呼べよ」
　リリスはヘルマンの怒る理由がまったくわからず、
「あそ、じゃあ、ヘルマン様。よろしくね。契約の証は、あたしとのキスよ」
「ええっ」
　ヘルマンは腰を抜かして床にへたり込んでしまう。
「そんな、俺、彼女いないし・・・・・・そんなことしたことないし」
　リリスはおもしろそうに笑いながら、
「あはは、ヘルマン様、純情ねぇ。いまどき珍しいくらい。十字軍騎士なんか、女を犯して回ってるのに」
「えげつないこと、いうなぁ！　女の子でしょっ」
「あらー、関係ないわよ。どうして女とか気にするの。ねえ。それよりさ、契約して」
　ヘルマンは、しょうがないなあ、と、慣れない手つきでリリスの唇に触れる。
　しかし、ヘルマンは興奮し、血が頭に上ってしまい、鼻血を大量に出して気絶してしまった。
「あーらま。こんなんで主人として、使えるのかしらね？」
　何なら契約を解除してもらおうかなんてことも、リリスは考えるが・・・・・・。
「でもヘルマンをからかうの面白そうね。もうちょっと一緒にいようっと」
　・・・・・・おやおや。

あたしはリリス（後書き）

ヘルマン、今回はどの程度壊れるんだろう！？
前回の終わり方じゃいやだから、革命起こされました、共和制に（汗。
ノリぜんぜん違うよね、前回と！
私の息子ヘルマン、いったいどうなることか。
というか、アダルトサイト読んでて思いついたネタだけに、ちょっとえろい（汗。
嫌いな人は申し訳ない・・・・・・。

皇帝撃沈計画！

もうじき、十字軍が七回目の遠征を終えようという時代だった。
騎士の遠征はようやく、終結を迎えつつあったのだが、十字軍の粗雑な態度は、改まることがなかった。
この当時、騎士どもは神の名を語りはしたが、古代のゲルマン人のごとく、乱暴を働き、追いはぎはするわ、食料が足りないからといっては、玄宗皇帝時代の安録山率いる石臼部隊のごとく、人肉を食べたりしていた。
ヘルマンはそんな騎士にだけはなりたくなかった。
どうせなら、ハインリヒ四世のような、強い皇帝に近づきたいと。
「ヘルマンなら、きっとなれるわよ。できればそうね。あんたみたいな皇帝のいたほうが、いいかもしれないわ」
リリスが励ますつもりか、うわべだけか、そんなことをつぶやいた。
「あ、ありがとう・・・・・・」
ヘルマンは言われて、頬を赤らめた。
「・・・・・・なりたい？」
ヘルマンは、怪訝そうにリリスを見やった。
「皇帝の地位に、就きたいかって聞いたの」
ヘルマンはうなずいていた。それもごく自然に。
なぜかはわからないが、なんとなく皇帝になれるという核心があったのだ。
「いいわ」
リリスが微笑んだ。
「それにはまず、今の皇帝コンラードをなんとかしたいわね」
リリスはなぜか、コンラードの名前を出したとたん、うれしそうに邪悪そうに、ニヤニヤとしていた。

「ぶえっくしょい！」
コンラード皇帝はリリスによってくしゃみを立て続けにする。
「陛下、お風邪を召されたか。ささ、お休みくだされ」
「あー、ちくしょう。別にだるくは、ないんだが」
「いけません。さあ」
宰相に導かれ、コンラードはしぶしぶ寝室に入り、扉を閉めた。
「宰相ゲオルギウス。いるぅ？」
なまめかしい声に反応し、大きな鏡の前で宰相は土下座をした。
「へへえ、ここに。リリスさま」
鏡には姿がなく、声だけが聞こえてくる。
「ゲオちゃん、お願いがあるのぉ。聞いてくれる？」
「は、はあ、もちろんでございますですよ。かわいいリリスちゃんのためなら」
「ありがと。コンラードを追い詰める準備はできてるようね。・・・・・・用意はいい？」
「御意に」

なんか、いやな予感が・・・・・・。

皇帝撃沈計画！（後書き）

コンちゃんが大変だ！
でもあいつ、自業自得キャラだもんなぁ。
リリスってば宰相をいいように利用！？
いいな、こいつ・・・・・・。

地下牢の姫

コンラードには捕まえてきた奴隷の東洋人娘があった。
言葉が通じず、コンは悩みの種を抱えてしまったと愚痴をこぼすものの、エキゾチックというか、謎めいた美しさに見惚れてしまう。
あの、深い、タルタロス（冥府）のように深い闇。
文字通り、突き落とされたら二度と這い上がれない深さ！
コンは娘を手放したくなかった。

だから、コンラードは、娘を地下牢に閉じ込めてしまっていた。

「まるでケルト神話のエスリン姫ね」
リリスは鼻を鳴らす。
「エスリンって、たしか・・・・・・魔王バロールの娘？」
「そうよ。さすがね。ヘルマン様。バロールはディアンケヒトの息子のキャンと娘が結ばれてしまうのを反対する。なぜならドルイドが予言したから。あなたは孫に殺されると。誰とも結婚させないために、暗い塔へ幽閉するが、キャンにそれは通用しなかった。彼は光の神だからね。どこでもすり抜けられる。そしてエスリンの夫となったキャンと、息子である太陽王ルーフを殺そうとするのよ。今の状況がまさにそれ。相手は父親じゃないけどね」
リリスはどっかりとイスに座り、ポルト酒を飲んだ。
「おいっ！　それは俺の酒・・・・・・」
「まあまあ。かたいことといわないのっ。地下牢に閉じ込められたお姫様。ヘルマン、助けましょう」
ヘルマンは皇帝を倒すなんて無謀だ、と反対したが、リリスは聞こうとせずに、
「あたしにまかせてよ。ね。悪いようにしないわ」

「悪いようにって」
「あなたの妻に、ふさわしいのよ」
リリスは酔いつぶれたのか、だらしのない格好でいびきをかいて眠ってしまった。
「まったくもう！　話の途中でなんなんだよ！」
ヘルマンは怒りながら毛布をかけてやった。
そして、心に思うことは、地下牢の姫のこと。
「俺もクセノフォンになれるのかなぁ」
ヘルマンはなんだか、うきうきと心を弾ませていた。

地下牢の姫（後書き）

ヘルマンがかっこいい！？
勇者タイプっていう感じじゃないんだけどなぁ。
まあ、あれだな、御伽噺じゃないけど、リリスが全部やってくれるって言う得なキャラだし（汗。

救出

「ゲオルギウス。ゲオルギウスはいるか」
コンラードが朝の会議に宰相を呼びつけた。
しかし、どの部屋にも彼はいなかったので、コンは不審がっていた。
「はて・・・・・。おかしなこともあるものだ」
コンは足元に銀色の美しい羽根ペンを見つけて拾った。
とたん、羽根ペンはきれいなおねえさんに変身！
コンは驚いて腰を抜かす。
「びっくりした～。誰だお前」
「あたし、コンラード様のために尽くしたいんです」
コンラードは無類の女好きだったので、来るものは拒まず！
「了解！　じゃあこんな時間だけど、ベッド行こうか」
リリスは転びそうになったが、そこはあえて耐える。
「お、おほほ、ご冗談がお好きですわ。今、朝じゃないですか。軍法会議も始まるんでしょ」
「おお、そうだった。ではせめて名前くらい教えてくれよ」
リリスはいやだったが、これも作戦のために我慢・・・・・・。
コンラードに抱きついて、キスをせがんだ。
「あたしはリリス。おぼえていてね、皇帝陛下・・・・・・」
「ああ、もちろんだとも。お前のような絶世の美女、忘れろっていっても忘れるもんか！」

その忘れるもんか！　が、忘れたいに変わるのは、すぐあとなんですがね・・・・・・。

リリスがコンを引きとめている間、ヘルマンはゲオルギウスに導かれて地下牢へ。
「ここです」
ゲオルギウスは鍵を開いた。
じめじめした暗い部屋。
そのなかに、鎖で縛られた少女が、泣くこともせずにじっと座っており、ヘルマンは彼女がかわいそうと、胸を痛めた。
少女はヘルマンたちを見上げて、何かいいたそうにしていたが、声がかすれて何も聞こえない。
「水を」
ヘルマンがゲオルギウスに頼み、少女のそばにひざまずいた。
「擦り傷だらけだし、手が冷たいね」
言葉のわかることに驚いた少女、うれしさのためか、涙を流し始めた。
「わかるの？　私の言葉が」
「うん、ちょっとだけ。僕はヘルマン」
ヘルマンは彼女を背負って牢屋を出た。
「ゲオルギウスさん、水を飲ませてやって」
ゲオルギウスはコンに同じことを言われると腹が立つのに、なぜヘルマンだと穏やかでいられるか、不思議でならなかった。
「リリスが言うように、あなたこそ、帝位にふさわしいのかもしれません・・・・・・」

救出（後書き）

いや、なんかもう、とんとん拍子じゃないですか、これっ。

僕と一緒に

リリスは仕方なく時間稼ぎのために、仕方なくコンラードと・・・・・・男女の契りをしてしまっていた。
――あーあ。これだったら、ヘルマンとしておきゃあ、よかったわ。
リリス、ちょっと後悔。
しかし、じつのところ、彼女はまんざらでもなさそうで。
「コンラード様、ハンサムですものねぇ。あたし、ファンになっちゃう」
「はっはっは、そうであろう、そうであろう」
いや、あろうって・・・・・・・。
リリス、軽すぎ。

「私、ソラって言うの」
ヘルマンの背中で、娘が言った。
「ソラ。珍しい名前だね」
「倭(やまと)の生まれですから・・・・・・」
ヘルマンは、リリスの言った言葉を思い出す。
――あの子は、あなたにふさわしいわ。
ヘルマンはどきどきして、ソラを背負うだけで満足だったのに、さらには妻にもできる可能性がある、ヘルマンとしては、まさしく『死んでもいい』状況であった。
「ソラ。僕と一緒に暮らさないか。もしいやじゃないなら、だけど。行くあては、ないのだろう。僕がきっちり面倒見るよ」
ソラはヘルマンのことが、一目で気に入って、一緒にいると安心することもあって、その申し出を承諾した。
「その前に、やることがございますでしょう、ヘルマン殿」

ゲオルギウスは涼しい顔をしてヘルマンを促した。

僕と一緒に（後書き）

シンデレラストーリー・・・・・・。
相手がドロテーアじゃないだけに、けんかは弱いソラ（汗。
ドロテーアは長身で、フランス兵を蹴散らす強さもってますんで・
・・・・・。

間抜けなコンラード

「リリスちゃん、もうちょっと一緒にいようよぉ」
結局三時間もつき合わされ、コンラードの強さにリリスも呆れ顔。
「あんたね、いったい、いつまでやらせるつもり！？」
「皇帝にそんな態度でいいと思ってるのか！」
急に偉ぶるので、リリスはいい加減帰りたくなった。
「あんたみたいなわがまま、嫌いよ・・・・・・」
といいたいものの、ヘルマンがソラを助けたか、が気になるところ。
リリスは、おとなしく皇帝に従った。

契約した以上、リリスはヘルマンを守らなくてはならない。
もし術者を殺せば、自分は灰になって消えてしまう。
そんなのはごめんだった。
それに、いけないことと知っていても、リリスはヘルマンが好きだったのだ。
好きともなれば、なおのこと、ヘルマンのために犠牲になるしかない。
リリスは・・・・・・つらかった。
人間は人間同士、愛し合うほうがいい。
だから彼女はソラを勧めた。
自分の存在価値は無視し、人間ではないのだからと自嘲して。
「あたしは悪魔よ、サキュバスよ！」
やけくそになり、コンラードに抱きついた。
でも・・・・・・。
「わがままをたたきなおせば、コンラードでもいいかなぁ」
とにやけるリリスの気持ちが・・・・・・わからない。

「リリス、助けに来たぞ！」
ヘルマンが武装して、コンの部屋に殴りこみ！
しかしリリスの一糸まとわぬ姿に、ヘルマンは恥らった。
「な、なんて格好を。服を着ろよ、は、はやく」
コンラードは前を隠すのも忘れ、ものどもであえ、曲者じゃ、とやっている。
「きゃーっ！　皇帝のバカーッ！」
ソラが視線をそらす。
愛するソラにみられちゃったコンラード、あわてて服を身につけた。
しかし、服が引っかかって足がもつれ、床に倒れ・・・・・・。
ヘルマンは見てられないと、コンラードに手を貸した。
「俺、あんたと戦う気なくしたから、もうどうでもいいや。その代わりソラもらっていくよ」
「なんだと！　それだけはゆるさ・・・・・・」
再びソラの黄色い声が轟く。
ベルトが緩められたせいか、コンの履いていた着物が、ずるずるとずり落ち、また丸見えに。
「わ、わかった、もういい、ソラをくれてやる」
「もうひとつお願いがあるんだけどなぁ」
リリスに懇願され、コンは鼻の下を伸ばした。
「皇帝の座を引いて、あたしと一緒に暮らさない？　ねえ、いい条件でしょ。ヘルマンに譲ってあげてぇ」
「そ、それもいいかも～」
ヘルマンはコンラードのいいかげんさに、心底あきれ果てていた。
「考えてみりゃあ、リリスのほうがいい女だよなぁ、うへへへ」
ヘルマンがここで突っ込み。
「な、なんて軽いんだ・・・・・・」

「皇帝の意思なんて、こんなものかもしれません」
振り返るとゲオルギウスがやってきて、にやりとほくそえんでいた。

間抜けなコンラード（後書き）

いいんかいっ。
これでいいんかいっ。
作者はこういう展開のほうが、好きだけどね・・・・・・。

骨抜き

「俺はやっぱり、ハインリヒ四世が好きだから、ハインリヒと名乗ることにするよ」
皇帝ハインリヒと名乗ったヘルマン。
権力を手にした彼は、コンラードのように壊れたりもせずに、よく治世した。
あいつは壊れすぎだったのよ・・・・・・。

ヘルマンはソラを正妻にして、幸せに暮らした・・・・・・。
はずであった。

「ちょっと、あなた！　お湯くらい沸かしてっていつもいってるでしょ！」
ソラの最強の蹴りが、今日も飛ぶ。
いや、とんだらあきまへんがな・・・・・・。
相手は皇帝なんだから。
「でもゲオルギウスが・・・・・・」
(ゲオルギウスがやっちゃだめっていってたんだよぉ)
「人のせいにしないの！　皇帝になってからのあなたは、何もできないだめ人間じゃん！」
「皇帝の后になったあなたは、いつも怒ってばかりじゃん！」
毎日こんな言いあいばかり。
まあ、仲の言い証拠だな・・・・・・。
「どこがやねん！？」

コンラードはコンラードで、ロビンソン・クルーソー漂流記じゃないが、リリスとふたりで惨めに貧しく、いかだに乗って大海をさ

まよっておった。
「おれたち、幸せっていえるんだろうか・・・・・・・!?」
あんた、どうせなら海賊に戻ればええねん・・・・・・。

そして、新たな敵、魔王出現!?
魔王って何だ、魔王って・・・・・・エス〇ークか・・・・・・・?

「うーん、台本としてはこれかな」
老人作家が、中世を舞台に描いた史実の大作、『ヘルマンとコンラード』の内容に、うなりながら見直す。
「先生、今回も大作ですね」
演出家が誉めそやした。
「うむ、だろうね。おっと、自分の作品にそれはいっちゃ、だめだったな」
わはははは、と作家は笑い出した。
老人の背後に、ハイヒールの音がし、立ち止まったので振り返ると、妖艶な娘が立っていた。
「ねえ、契約しない? お・じ・さ・ま」
いつか、ヘルマンにしたようなウインクを投げかけ、相手の心を射止めようとするが、
「あ、いま、いそがしいんで」
むげに断られてしまった・・・・・・。
「なんなのよっ。ちょっとは動揺してよ!」
「あのね、きみ」
作家は呆れ顔で言った。
「ここがどこだかわかってる? 舞台だよ、ブロードウェーの」
「しってるわよっ」
「じゃあそういうことで」

彼女はリリスで、リリスは思った。
時代が違えば、悪魔を必要とするものがいないのだな、と。
「あのぉ」
証明係の青年が、リリスに赤い顔をして声をかけた。
「ぼ、ぼくならお茶くらい付き合ってもいいかなあと」
リリスはヘルマンに似た青年に、
「いいわよ」
と答え、奥に引っ込んでいった。

みんなも悪魔には気をつけましょう。
なぜなら、骨抜きにされて、皇帝の座や財産や地位を奪われてしまうかもしれないのだから・・・・・・。

骨抜き（後書き）

こんな終わり方でいいのか・・・・・・。
ひねりがなかったかなー。
プロット決めないで書いたから、こうなっちゃった。
次回は魔王編って、やるのか、魔王編！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0315a/

契　約

2010年10月8日15時50分発行